谷戸の物語 03

いつものはじまり

冷えきった大気が端々にまで染み渡り、日の光すら凍りそうな青空である。枯れた小枝をぱちぱちと踏みしめて石段を登り、振り返ればいつもの冬だ。上の社をまずきれいにして、その周りをきれいにして。参道をきれいにして、旗を立てて。初午まで、あと十日。

朝から待ちきれず集まる人々。こどもたちの列。遠くに聞こえる太鼓とお経。藁で包んだ赤飯に団子。目刺や酒饅頭。今年も誰かが言っている。お稲荷さんはやきもち焼きだって。他にお参りしたら拗ねるよ。だから絶対に大事にしないと。

人の集いと賑わいはとても刹那い。当たり前の繰り返しも、誰かが欠ければ容易く途絶える。だからお茶の一杯、お菓子のひとつ、あとは何か言い訳があるといい。ドラム缶に爆ぜる火の粉を見つめながら、芯から冷えた身体を寄せ合う。今年もこの日が始まった。